

白金藪

7月号



令和元年 7月発行 100 ‘号

定例句会（毎月第三金曜日 アビスタ会議室）

八月は休み

九月二十日（金） 第三正午～二時・当季雜詠五句

十月四日（金） 十時半～三時・山種美術館←國學院生協

十月十八日（金） 第五正午～二時・当季雜詠五句

七月例会句会報（蓮見船）（‘19／7／19 9名欠1）

光成高志

三日目の花托の黄色雌蕊也

瘤曰鳥番が二羽の子を連れて

蒲原に大きな蓮の花咲けり

野分けして蓮の葉皆裏返る

カヌーゆく添ふ蓮見船抜いてゆく

佐藤宏之助

舞妃蓮まだ一片も散らざる

エンジンを止め蓮沼の迷路ゆく

今生の別れに蓮見舟に乗る

明日咲く蓮華と船頭竿で指す

蓮を見て蒲見て傘寿を自祝せる

光 みち

扇風機猫の鳴き声出す不思議

蓮見舟の待合室に米袋

涼風や大橋真ん中潜りゆく

岸辺には救助訓練蓮見舟

四日目の蓮の花托の黄色とは

浅野正美

モータ一音川鵜飛び立つ蓮の沼

うちわやんま道案内す蓮見舟

見渡せる沼を覆いて蓮の葉や

あそこにもここにも蓄蓮の沼

沼の風涼し蓮の葉裏白く

田宮敦子

船宿に猫の置物蓮見かな

船宿や目高の泳ぐ池のぞく

手賀沼のカツバに逢いに蓮見船

時速四十キロの蓮見の船に乗る
空にとんび蓮見しながら沼巡る

磯目健一

爺四五人斎に草とる梅雨晴間
七月や得手に帆を揚げ宜候う
縋る猛る選挙カーの上梅雨湿り

船宿や魚拓古色に蓮見客

象鼻杯大吟醸のつもりなり

蓮見舟あと白波の橋くぐる

沼底の泥に白骨蓮の花

尺鮒の穴場と知らず蓮見かな

増田陽一

動き出す蓮見船追ふ行々子
梅雨止まず鎮守の森は深々と
海に出る道は海桐の続く道
梅雨晴の空つき上げて朴ひらく
荒海や賽の河原のほとけたち（佐渡外海府海岸）

武者昭七

武者正子

夜鴉の昼飛ぶときを立ち眩む
岸歩く雉を見ている蓮見舟
沼なれば水薙ぐ鳥のコブ白鳥
妻の忌日」とりと揚羽生れたり
展翅せり妻かも知れぬ揚羽蝶

飯田孝三

熱砂に強雨生けるものの匂い立つ
かたつむり体のばして床運動
梅の実を煮つめてジャムのつや樂し
未明から座して聴く夏鳥の声
山門に蓮の鉢置く昼夜り

鶴が杖に翼十字にかつ窄め

眼中の物浮子一つ源五郎

一句鑑賞

武者正子

扇風機猫の鳴き声出す不思議

蓮見船の船宿での様子だそうです。扇風機が何か音を出していた。それが猫の鳴き声のように聞こえた。それを「不思議」と表現したことに面白味を感じました。我が家の扇風機だつたら不審、不気味、心配等々余裕のない感じ方をするでしょう。やはり蓮見という楽しい行事でのことなので「不思議」になつたのだと思います。

一句鑑賞

明日咲く蓮華と船頭竿で指す
あそこにもここにも運運の沼

蓮見船の船頭は、葉群れの中の一点の蕾を竿で指して明日の開花を予言してみせる。餅は餅屋、経験あるプロらしい自信に満ちた船頭の所作に感心しながらも、開花が明日ではつまらないという思いもないではない。視界に点在する蕾の割りに満開が少ない。一望の蓮沼の風景も浮かんでくるのが第二句である。

鶴が杙に翼十字にかつ窄め

羽毛の油分が少ないので、鶴は潜水で濡れた肢体をとかすため杙などにとまって絶えず翼を十字に広げたり窄めたりする。吟行句らしく野鳥の習性を如実に捉える。

空にとんび蓮見しながら沿巡る

梅雨晴れの空に鳶が悠々と飛んでいる。その下の一望

みち

空の高さと広い視野を感じさせる

の沼に蓮の群生地がある。そこを目標として蓮見船は進む。空の高さと広い視野を感じさせる。

蓮を見て蒲見て傘寿を自祝せる

宏之助

米寿を迎えて今年も蓮見船の吟行に無事参加して生きる楽しさを堪能した。これこそ天恵の傘寿を自ら言祝ぐ行事であつた。他に求めず優遊自足、無意味に齡を重ねなかつた自立派の到達した羨ましい境地である。

梅雨晴の空つきあげて朴ひらく

昭七

連日の雨が明けて、久しづぶりに晴間が広がる。葉も花も大柄で遠目にも存在感のある高木の朴。枝々に圧巻の大きさの白い花をいっぱい咲かせて、青空に向かつてそそり立つ。それは、まるで鬱陶しい雨期の終わりを全身で歓喜して、蒼天へ万歳拳手しているかのようである。

未明から座して聴く夏鳥の声

正子

短夜というほど初夏の夜は明け早い。早くも暁暗に起床し、ひとり茶を喫していると、外から郭公の声が聞こえて来る。在るものは吾と郭公のみ。遠い鳥の声が味爽のひとときの静謐さを深める。

吟行不參後悔記

磯目健一

七月十九日の朝。今日の蓮見船の出航は正午と思い込み、家でのんびりしていたが、去年の吟行では同じ船宿

から蓮見船が十時頃出航だつたのをふと思い出した。手帖で誤解を確認、悽然として時計を見ると九時半。急遽、自転車を飛ばして小池ポート場に駆け付けたが、時すでに遅し、五分前に蓮見船は跡白波と出航していた。来るのを直前まで路上に出て待っていたのよと女店主。我が家から蓮田を遠望をと思つたが、女店主の言によれば、まだ開花期には早過ぎて、むしろ釣り堀のほとりに咲く艶麗な舞妃蓮の花を見るに如かずと勧める。美智子皇太子妃にあやかって平成天皇が名付けたという名花を鑑賞する心の余裕はとても無くて、悄然近くの図書館へ行き、正午からの句会を待つた。思えば生まれて始めて吟行というものに参加したのは、一年前の印西水郷巡りであった。そこで吟行という俳句界独特の行事がもつ功德と滋味の一端を初めて知つた。仰々しくいえば、囁目の特殊な具象に普遍的な詩情を見出す姿勢。その先にこそ創造の結実があるという信念。豊かな自然の客觀写生。漠然とそんなことを感じた。遠足の子ども達のような、お祭り気分が醸す皆のユミカルな言動も面白かった。川船から上がり会館の傍らに来たとき、通路で蛇に遭遇し悲鳴が上がった。やにわに宏之助さんが素手で蛇を掴んで放

り投げた。びっくりした蛇は周章狼狽植え込みの蔭に身を隠して動かなかつた。相当大きな蛇だつたらしい。やんちやな少年時代の片鱗を見た思いがした。水郷に棲む白鳥の繁殖の上の最大の妨げが、親鳥の居留守を狙つて巣の卵に忍び寄る蛇だとガイドが言つたが、岸辺の葦の繁みを川面から見れば水辺に蛇が多く棲むことが実感できた。船縁で聴く行々の鳴き声の迫力、舳先の白鳥の群れ。葦原を縦横に通じる水路など、見るもの聞くもの吟行なればこそその発見に満ちていた。興正さんと初めて会つたのも「紀子さんと初めて話したのも」の水郷巡りのときだった。今、お二人の句を「白金霞」で見られなのは淋しい。神よ（そして主宰も）、照覧あれ。来年の蓮見船には必ず乗ることを誓います。

芭蕉のかかるみ以後（54）

光成高志

芭蕉の自画自筆巻子は、絵画と文芸、山水画と俳諧の二つが各場面ごとに融合して見る者をして宇宙的な共感を迫つてくる、と栗田氏は書かれている。又この作品を体得するには、文芸と絵画の両面から迫らねばならない、というのも同感である。文芸については和漢の古典を踏まえたその原典が明らかにされているが、絵画についての研究は少ない。楠本六男著の「芭蕉、その後」（竹林舎

(二〇〇六)の中で画巻における三十一景の画の一つ一つを詳しく述べて分析紹介しているとか、私は未見なので引用出来ないが、栗田著から孫引用して論旨を述べれば、たゞえば、小夜の中山の絵解きの中で、東闌紀行の詩情を具体化しているとみれば絵そのものが稚拙であつてもその構図と矛盾なく納得できる。逢坂の山を越えるときの霧しぐれの季語も珍しいものではなく、源氏物語の賢木の「行く方をながめもやらぬこの秋は逢坂山を霧なへだてそ」の歌を踏まえ、東闌紀行には「相坂の闌うち過ぎるほどに、(略) 秋霧立渡りて」の文言があり、霧にたちこめられつつ逢坂山を越える詩情は和歌に通暎する人にとっては常識的なものであつた、とある。栗田氏は画巻と詩文とのイメージの呼応だけではなく、「源氏物語」および「源氏物語絵巻」の風景が取り上げられていることに注目している。源氏物語絵巻は今読んでいる源氏物語の絵巻で楽しむという週刊朝日百科六〇冊あるのを全部持つているので、私はこれをよく見た。先にスキヤンして示した先の絵を見てもらえば納得できる。最初の絵は江戸城と旅立ちの絵と最後の帰庵の絵柄が殆ど重なりあつていて、これに驚かされると、栗田氏が指摘しているが、これは塔と中段に町屋群の風景が微細に描かれる。間をおかず

「関越ゆる日」と本文がつづき、その左には、「霧しぐれ富士を見ぬ日ぞ面白き」の、霧がかゝり雲に隠れた「見えぬ富士」が描かれている（この図はスキヤンせす）。旅立ちの江戸風景が小さく描かれているのに、最終章の図では、隅田川と大橋と五重塔という絵は大きく描かれている。これは帰庵への想いの大きさを表している。この絵柄の大小は江戸への思慕の大小に対応するけれども、最後の絵の中央に忽然と姿を現した巨大な架橋に驚かされる。この橋の名を栗田氏は「夢の浮橋」と名付けられ、これこそ甲子吟行画巻の成果、語られざるものとの眞情まことこうと言つていい、とされる。これに大いに同感したので、この辺を思うままに書いてみたい。この名はある源氏物語五十四帖の最終巻の表題が「夢浮橋」であり、それに呼応させて付けたのだ。一体源氏物語の最終帖五十四帖の夢浮橋の筋はどうなつているのか、私は未だ柏木を終るとこを精読しているので、一足飛びに五十四帖に飛び、野ざらし紀行画巻の大橋の絵が源氏物語などのようになにリンクしているのかを考えてみる。先ず夢浮橋のあらすじを簡略して書いてみる。薫は比叡山の法会を行つた翌日、横川の僧都のもとに立ち寄り、浮舟の事を尋ねる。僧都是薫の様子から浮舟への深い愛情を察し、浮舟を簡単に出家させてしまつた事を悔やむが、しかし、今さら

隠し立てもできまいと、発見時から出家までの経緯を語る。薫は浮舟が生きていたことを確かめ、僧都に小野の庵への手引きを頼むが、僧都は罪を憚り一度は拒む。けれども、薫が連れていた美しい小君（浮舟の異父弟）に目をとめた僧都は、結局、文をしたためました。一方、小野では谷の方向から帰京する薫一行の松明の灯が浮舟の目にとまり、これを見て昔を忘れられない自分に気づき、憂わしい思いの浮舟なのでした。翌日、薫は小君を小野へ遣わします。また、小野にはそれとは別に僧都自身からの文もありました。その文から浮舟が薫と関係あることを知った妹尼は、浮舟を問い合わせる。浮舟が困惑しているところに小君が来て、持参した僧都の文を見た妹尼は、隠し立てをする浮舟をさらに責めますが、浮舟は薫に生存を知られたくないと訴え、小君にも頑かたくなに会おうとしません。小君は薫から浮舟へと託された文も渡す。思い余った書きぶりの文を読み、涙に暮れる浮舟。しかし、浮舟は文への返事を書こうとはしません。結局小君は浮舟に対面できず、文の返事ももらえず、悄然として帰る。報告を受けた薫は、誰かが浮舟を隠しているのかと、あらぬ疑念まで抱き煩悶するのでした、ともとの本にあるようでございます。これで終るが、原文の最後は、「こそ本にはへめる」となつていて、他の人が

書いた本を書き写したかのようになつてているのも柴式部の発明である。（めでたしめでたしでおわることはない。蓬生でも、もう頭が痛くなつてきたので終わりにする、とか、若菜下ではお経の途中で投げ出したように終る。）夢浮橋は夢か現うつか、幻の「ことき浮橋、憂き橋、そのただなかに浮舟は行きなずむ。絵巻には髪を下ろした浮舟が後ろ姿にて座つている。髪を下ろすと言つても今の尼姿を想像してはいけない。背中のあたりで切り揃える尼削ぎ姿なのだ。鈍色の衣をまとい、侍女にかしづかれたながらの仏道三昧の日々を過ごすのだ。式部は浮舟をどうしようと考えたのか。横川の僧都の真意は浮舟への手紙に入れられている。その文面たるや難渋を極める。はつきりしない。「もとの御契り過ちたまはで（前世の因縁を過つことのないようになさつて）」「大将殿の『愛執の罪』を晴らしてさしあげて、一日だけでも出家したことの功徳は計り知れないものですから、これまでのように仏縁を使りになさいませ。詳しく述べはとりあえず小君から」とあるのであつた。愛執の罪をはらすとはどういうことか。還俗して薫との関係に復せよというのか、出家したまま薫との異性関係を清算せよというのか、いつたい僧都が還俗・非還俗のいずれを勧奨するのかどうにも読み取りにくい。この文面の前に「いかがはせん（どうしたものでしようか）」と迷いが示

されているのを考えると断定とは程遠い逡巡が滲んでいるのがこの物語の特徴であり、それは式部の思いなのである。浮舟に真の救いが訪れるのであるか、謎を残してこの長編物語は幕をおろす。私達読者の心に美しい残像を刻みつける。大いなる余情というべきである。この結末のない幕引きに満足しない後世の作者が書いた「山路の露」という続編があるそうであるが、これとて夢浮橋と大差ない幕引きとなつてゐるとか、源氏物語の人々の迷妄に満ちた人生は、どれ一つとて哀切な輝きを放たないものはない。最後の浮舟の悩み臥す姿もまた、かけがえのない輝きを帶びている。この巻末にそれ以上の言葉が必要か。私たち読者一人一人の心中でその余情を夢想されることを式部はのぞんだことではなかつたか。そこを芭蕉は絵巻にしたのはなかろうか。西行物語絵巻や源氏物語絵巻はそれとして受容し、さらに実際的な現実的な画巻を描いたのである。第一源氏物語の注釈本「湖月抄」を残したのは芭蕉の俳諧の師、北村季吟である。その子の湖春とも付き合いがあり、この野ざらし紀行で京都の秋風を訪ねた時に湖春とも歌仙を書いているのである。それに私が今読んでいる源氏物語は頭注があり、本文に解釈文が小文字にて付いているが、これは季吟のこの湖月抄が底本となつてゐるのだ。遠くと言え

ないほど芭蕉とつながつてゐるのである。言葉にならぬ主客未分のものが芸術にはあるし、それを絵にしたり音楽にしたり、はては芸能もその分野にはいる。芭蕉の言葉に云う風雅の誠を画卷に残したのではないか。奥の細道はその暇がなく亡くなつたが、後の蕪村がわかりやすく俳文と絵を融合させて描いている。昔水戸の美術館での展示があつたのを見に行つた。蕪村の墨絵は大津の美術館まで見に行つた事もここで思い出した。毎年私の同級生のM君が日展に出す絵を見に来よと招待状を寄せます。陽一さんのエッティングも毎年発表される。画卷の動機にこつけて脱線したけれども、夢浮橋の絵は何を表しているか。米国籍の日本人ハルオ・シラネに『夢の浮橋（原題：The Bridge of Dreams）』（中央公論社）という英文の研究書があるそうで、栗田氏はすぐ買って読んだとか。学術的な構造的分析に近く、近代的文学論文としては見事なものであるが、それだけに限定的となる、コメントされている。私はもうそこまで取り寄せて読んでみようとは思わないが、この夢の浮橋は仏教でいう此岸と悟りの境地である彼岸とを結ぶ架橋であるという暗喩（メタファー）として位置づけられてゐるという点には賛成である。芭蕉は名古屋から甲斐を通つて江戸に帰つて来て、ああこの橋を渡ればまた俗世間の中に入つて行く。

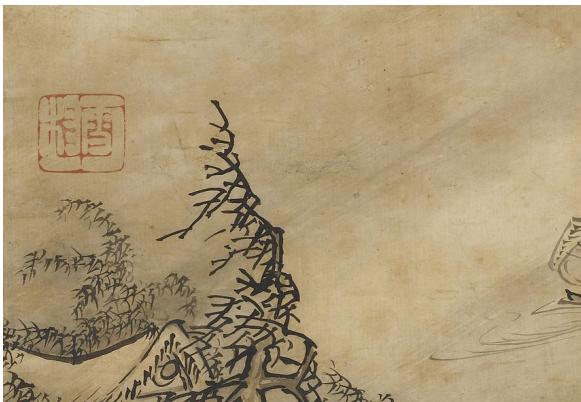
今こゝは、楽しい横様に好きになつた風狂の世界であつたのに、やれやれという心境である。彼岸がこの旅であり、此岸がこれから待つてゐる実人生である。実人生を歩んで行かねばならぬ芸術家の虚実の宿命を思わずにはいられない。これを人間に当てはめれば、男と女に現れる愛情の宿命に至る。人間が人間を愛すると言つことは、子を残さんとする欲望、これをなんといつたらいいのか、本能的欲求が純粹な人間愛の障壁になるという人間の二律背反性を象徴した物がこの橋ではなかろうか。言語はどうしても分析と論理を以て意味をもつが、しかしながら山水画では見た瞬間直接に我々の頭脳にイメージを結ぶ。見る者の経験知識などに反映してその画の世界に同化することが出来る。見る事とはすなわち言語を越えた部分にある。たとえば先に名付けた夢の浮橋の画を見て言葉では表せない人の真心、いや哲学で云う実存(existence)に通ずる何もの、これを貫道するものは一なりとする一なのではなかつたか。栗田氏はこれを芸術的実存とやや曖昧な表現を呈示している。芭蕉の挙げている四大巨匠、西行、宗祇、雪舟、利休の中に雪舟がいること、その後には雪村（一五〇四～一五八七）の画風も愛したとか云われている。一例として雪舟の秋冬山水図

(冬景図)

(東京国立博物館)

を下右に示す。下左に雪村

の風濤図（重要文化財）野村美術館蔵を示す。



お便り広場（到着順、敬称略）

梅雨明けが待ち遠しい頃となりましたが、お元気ですか。白金葭六月号有難うございました。いろんな人の句を詠ませていただき有難うございます。昨日、夏井いつきさんが俳句文化の普及活動をされていて対談の記事を読む機会を得ることができました。気軽に俳句が詠めたらいいと思いました。うつとうしい毎日ですが、お体大切にお過ごし下さい。

（7.22 昇）

前の畠の様子や賀茂川、それに前方の海などを見て五七五と指を折つてメモすることでも十分楽しめます。そのためにはよく歩くことです。昇君もいい年になつたのだし、この辺で自分をよく見つめて下さいよ。高志

今回は個人的漫文禁止の方針を犯してしまったようです。主宰の伴走者を自任する私たる者、いい気になり脱線したことお詫びします。「白金葭」の誌風を守る編集長の採否決定には全く異存ありません。妥協せずみずからの信念の節操を貫く備後人の面目を目の当たりにするようで、爽やかに思われました。今後もどしどしこの方針でお願いします。（編集とは精選ですから）次号までは時間もたつぶりあることゆえ、金子兜太論を書いてみようかと考えています。宇井十間の論文には大いに触発されま

した。眼鏡に叶うようなものが書ければいいのですが。仰せの如く去年の蓮見船は確かに乗り、記念写真も大切に持っています。今月の私の投句は去年の吟行を思い出しながらのものでした。再会の九月が待ちどおしいです。これから猛暑本格化です。くれ吳れも御自愛を。（7.22 健二）未明に目覚めてパソコンに向かうと、主宰からのメールを発見、あれ嬉しやとが早速読むつもりが、なんと抹消のボタンを間違つて押してしまつたのです。まさに老い耄れの悲しさ。起きがけが危ない瞬間的認知症です。そんな訳で、せつかくのメールが消失してしまいました。たいへん恐縮ですが、もう一度送信していただけませんか。今月号の小山陽也氏追悼文は良かつたです。とても感動しました。小山さんは、安蒜さんと同じく由緒ある旧家の御曹司だったのですね。氏が早くより主宰の人となりを認めて死去するまで深く敬愛していました。追悼文の切々たる哀惜のこころをバックに如実に浮かんできました。名読者あつての天下の名句のように、小山さんは光成高志という名句の名読者だったのですね。追悼記は、羨ましい心の交流記でもあり、これほど人をひきつける人間の実存にあらためて瞠目する思いでいます。

（7.25 健二）

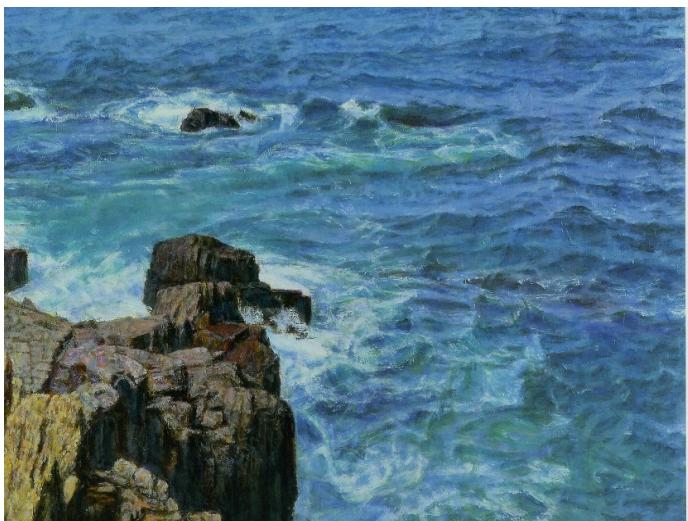
7/19
* 蓮見舟
7/21
SBT
7/23
SBT
7/24
SBY
7/25
SBT
7/28
SBT
7/29
葛西臨海 公園
*2
7/30
SBT
7/31
BY

編集後記

*水玉が蓮葉の芯に自得せる
青藻びつしり蓮池を覆ひたる
舞妃蓮の大きな花を開きたり
川鵜二羽オダ場の梁に止りをり
梅雨晴れて雲間に日差しありにけり
涼しさや一連の手賀大橋潜る
丈短し日照少なき夏なりと
水面に頸の座らぬ蓮蓄
野分にて蓮葉の裏葉見えてゐる
蒲の穂の若き細巻き立つてをり
葉柄を切つて雅客の象鼻杯

蒲の葉の断面ハニカムストラクチャー
捲れたる浮葉蓮華に紛ふ如
うちわやんまつるんで眼前過ぎりゆく（みち）
蓮浮葉船頭水を掛けくれる（ロータスエフエクト）（みち）

白金霞七月号（通巻第一〇〇号）令和元年七月二十七日発行
編集・発行人 光成高志 発行所 二七〇・一二一九 我孫子市南新木二四一七
表紙の題字・加納綾女 写真は七月二十一日の白金霞

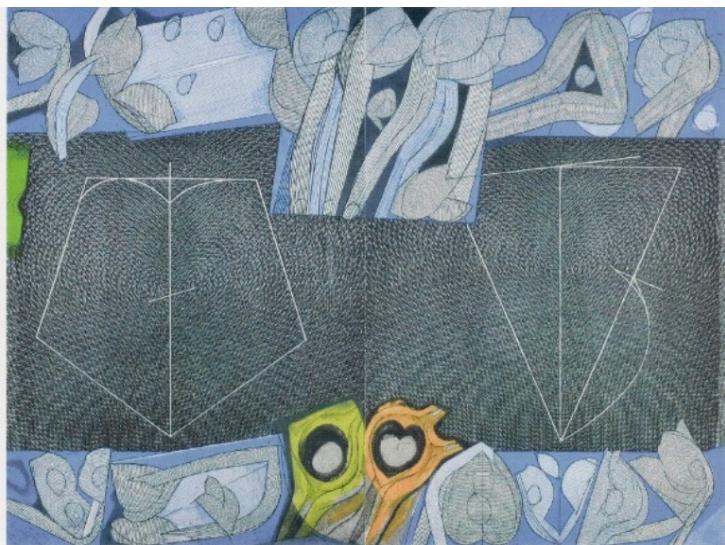


改編
新第5回日展(2018)

海景・初夏

三原捷宏

第5回日展(2018) 海景・初夏(三原捷宏)



増田陽一／博物誌'18-1

第92回国展 国立新美術館